

こうした点にいつその注意を払っていただければ、われ読者としてはさらに安心して、序文や巻末に予告のある本書の続編を待ち望むことができよう。

(三輪 卓爾)

〔医歯薬出版、東京都文京区本駒込一七七一〇、電話〇三三三九四四一三三三、一九九三年、A五判、二三九頁、二八〇〇円〕

### 三浦豊彦著『快適環境のフォークロア』

衛生学は「水と空気」から始まって「水と空気」で終る、と言われるが、本書はその衛生学の真髓についての歴史書である。

医学部における衛生学、その中でも環境衛生学の講義は、学生たちには人気がない。p p mと言っただけで頭の痛くなる学生がいるようである。

そもそも環境基準とか許容量の決定は、人類の健康にとつて大変なことであるから、これに関係する当事者たちは、互いに一步も譲ることがならず、必死のつばぜり合いになる。例えば悪いが、春闘の賃金交渉みたいなものである。これが決まるまでは、いろんな人生絵巻が現出するが、いったん決つてしまうと独り歩きするのは数値だけである。

環境衛生学の講義で学生に示されるのは、この結論であるが、それは人っ子ひとり見当らない砂漠のようなものである。

学生たちがこんな講義に好感を持たない気持はよく分かる。ところが、この無味乾燥な骨標本の上に肉を付け、血が流れるようにしてくれるのが本書である。著者は労働科学の研究に生涯を捧げ、また医史学には極めて造詣の深い三浦豊彦博士である。これ以上の人はいない。

本書の概要を手短かに示そう。そもそも、水と空気の衛生は、既に古代エジプト、古代ローマ時代からの大きな関心事であった。もし、彼らの努力がなかったら、都市形成に手間どり、文明発展の時期は大きく遅れ、今日の世界はなかったかも知れない。

しかしながら、著者によると、この人類の共同目標の前に立ちほだかつたのが、鉱業、そして工業であった。人類はここに一つの危機に立たされたわけである。最初の犠牲者は鉱工業の労働者に限られていたが、そのうちに汚染範囲は無制限に拡大し、今日では地球全体が危険に曝されている。

そればかりではない、最近の巨大化した技術は、人間の労働と生活の環境を人為的に変えるようになってきた(アメニテイ)。勿論、その意図するところは環境の改善であるが、それは非自然化に連らなる。われわれはこのアイデアの功罪について、さらによく検討しなければならぬ。

以上が本書において著者の指摘していることの要約であるが、著者はこの主張を展開するに当って、本書全体を人間味あふれる物語り風に叙述しておられる。これが本書の大きな特徴であり、著者の豊富な知識と経験から出る文章は読書の

心をとらえずにはおかない。その巧みな話術の一端をご紹介しよう。

本書には植村直己、織田信長、鴨長明、夏目漱石、ナポレオン、新田義貞、吉田兼好および和辻哲郎など、歴史的には有名であるが、どう考えても環境衛生には縁のなさそうな人物が登場してくる。ところが、彼らは誰一人として水と空気の問題に無関係ではないのである。

では、どういう関係かと興味をお持ちの方には、ぜひ本書のご一読をおすすめする。著者の軽妙なタッチが十分満足を与えてくれるであろう。

(山本 俊一)

〔労働科学研究所出版部、川崎市宮前区菅生二一八一四、電話

〇四四一九七七―二二二一、一九九三年、A五版、三四〇頁、

四九〇〇円〕

片桐一男著『蘭学、その江戸と北陸

―大槻玄沢と長崎浩斎―』

本書は、青山学院大学教授で本学会評議員であり、人物叢書『杉田玄白』をはじめ蘭学関係の著書の多い片桐一男博士が、越中高岡の蘭方医長崎浩斎のほう大な資料を精力的に調査研究整理された魅力的な労作である。

著者によれば、蘭学史の研究には「資料的制約に阻まれて進展をみないでいる分野も多く残されている。例えば、蘭学塾の内容調査・分析、蘭学界における中央と地方との関係、

その人的・物的交流などなど、重要問題で取り残されている問題」が、思いのほか多いという。そしてこの長崎浩斎関係資料は内容が頗る豊富であり、これら未解決の諸問題に対して具体的な解答を与えうるものがあろう、とされている。

本書の内容は、第一部の資料篇と第二部解説篇とから成っているが、その資料篇は誠に多彩な内容であり、特に文化十四年（一八一七）江戸へ遊学した長崎浩斎が大槻玄沢と杉田立卿らに学んだときの記録『東遊裸録』と、高岡へ帰った後も頻回の文通により玄沢の指導を仰いだその大槻玄沢と長崎浩斎との往復書簡四十一通の紹介とは、何といっても本書の圧巻である。

江戸の中心的蘭学塾の大槻玄沢の「芝蘭堂」と杉田立卿の「天真楼」とに学んだ浩斎の備忘記事の『東遊裸録』は、江戸の蘭学塾の学習の内容と人々の交流を具体的に伝えていて、誠に興味深いものがある。浩斎のような短期間の蘭学書生は「医範提綱」や「解体新書」の講義を聞いて、更に繙帯の実習などを受けているが、翻訳力までは求めていない様子などが知られるようである。

一方、大槻玄沢の書簡は新出の一大資料群であって、蘭学の中心の江戸と北陸との蘭学の交流は、書籍の翻訳や新刊の情報、その入手のあっせんや写本の提供から、更には広範な知識・意見の交換へと、この師弟が示す知識欲、蒐集意欲の強さには全く驚くほかないようである。輸入文化たる蘭学が、どのように受容消化され、地方へ浸透して行ったのか、近世